

研究主題

学習内容の習熟の程度に応じた指導に関する研究

抄 録

本研究のねらいは、個に応じた指導の一つである学習内容の習熟の程度に応じた指導に焦点をあて、その具体的な指導の手だてを明らかにするとともに、各学校が児童・生徒の学習内容の習熟の程度に応じた指導を推進するための資料を作成することである。そのために、基礎研究、実践研究を通して研究を行った。

基礎研究では、学習指導要領や各審議会答申等の記述を基に、学習内容の習熟の程度に応じた指導をはじめとして、個に応じた指導の充実が求められている背景や経緯を明確にした。また、先行研究を分析し、習熟のとらえや習熟の程度に応じた指導の具体的な手だて及び課題について明らかにした。さらに、学習指導要領の記述を分析し、各学校が学習内容の習熟の程度に応じた指導を推進するための資料を作成した。

実践研究では、基礎研究で明らかにした習熟のとらえを基に、小学校国語及び算数で検証授業を行い、学習内容の習熟の程度に応じた指導の具体的な手だてを明らかにした。

本研究を通して得た成果は、以下のとおりである。

- ・ 習熟のとらえを明らかにし、各時間の学習内容に即して具体的な児童の姿を想定して学習を進めることは、児童・生徒の学習状況の詳細な把握と的確な支援につながる事が分かった。
- ・ 先行研究や学習指導要領及び学習指導要領解説を分析することで、習熟の程度に応じた指導を実践するための資料を作成した。
- ・ 検証授業における児童の変容等の分析から、習熟の程度に応じた単元構成の方法や具体的な手だてを明らかにした。それを基に、ヒントカードの有効な提示の仕方、少人数指導の組み合わせ方等を盛り込んだ指導事例を作成した。

目 次

研究の背景とねらい	107
研究の方法	
1 基礎研究	108
2 実践研究	108
研究の内容	
1 学習内容の習熟の程度に応じた指導の明確化	109
2 習熟の程度に応じた指導の工夫の基本的な考え方	110
3 習熟の程度に応じた具体的な指導の工夫	111
4 習熟の程度に応じた指導事例	
小学校国語	113
小学校算数	117
研究のまとめ	
1 研究の成果	121
2 今後の課題	121
資料「学習指導要領に見られる習熟等にかかわる記述とその具体的な指導の工夫」	122

研究の背景とねらい

中央教育審議会は平成 15 年 10 月に「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善の方策について」(答申)を示した。その中で、児童・生徒の実態に応じ学習指導要領に示されていない内容を加えて指導することや、個に応じた指導の一層の充実を改めて求めている。この答申を受け、平成 15 年 12 月に学習指導要領の一部改正が行われた。その中で、個に応じた指導の例示の一つとして、これまで中学校学習指導要領で示されていた学習の習熟の程度に応じた指導が、小学校学習指導要領の総則にも付け加えられた。また、小学校の社会、算数、理科、家庭、中学校の国語、社会、数学、理科、保健体育及び技術・家庭の各教科の内容の取扱いにおいて、「内容の範囲や程度等を示す事項は、すべての児童・生徒に対して指導するものとする内容の範囲や程度を示したものであり、学校において特に必要がある場合は、この事項にかかわらず指導することができること。」との記述が追加された。このように、各学校には学習内容の習熟の程度に応じた指導など個に応じた指導の一層の充実が求められている。

東京都教育委員会では、個に応じた指導の充実のため少人数学習集団による指導の推進を図ってきた。平成 14 年 3 月には「少人数学習集団による指導 - 実践の手引き - 」を、また平成 16 年 6 月には「授業改善ハンドブック」を作成し、学習内容の習熟の程度に応じた集団編成の例や、習熟の程度や興味・関心等に応じた少人数学習集団による指導の進め方を示した。さらに、研究推進校を指定しその研究内容を広く普及・啓発するなどの取組みにより、個に応じた指導が各学校で取り入れられるようになってきた。

東京都教育委員会がまとめた平成 16 年度教育課程の編成・実施状況によると、各教科等の指導の重点とした内容について最も多くの学校が選択したのは、基礎・基本の定着を図る指導(小学校約 95%、中学校約 98%)であり、次に多いのが個別指導やグループ指導、習熟度別指導、チームティーチングなど個に応じた指導(小学校約 87%、中学校約 85%)である。個に応じた指導の中でも、理解や習熟の程度に応じた指導は、小学校で約 94%、中学校で約 72%の学校が実施するとしている。また、理解や習熟の程度に応じた指導を実施している教科等は、小学校では算数(約 77%)、中学校では数学(約 49%)が最も多くなっている。これらのことは、東京都の 9 割近い小・中学校において何らかの方法で個に応じた指導を実践していること、その中でも理解や習熟の程度に応じた指導を実施している学校が多いことを示している。

このように、多くの学校で学習内容の習熟の程度に応じた指導は実践されているものの、その取組みは様々であると考えられる。

そこで本研究では、これまでの答申や学習指導要領の個に応じた指導にかかわる記述、東京都における施策、各学校の取組状況やその実態を踏まえ、さらに児童・生徒の習熟の程度を把握し学習内容の習熟の程度に応じた指導の充実を図る必要があると考え、次のようにねらいを定め、研究を進めることとした。

- ・ 学習内容の習熟の程度に応じた指導の具体的な指導の手だてを明らかにする。
- ・ 学習内容の習熟の程度に応じた指導を推進するための資料を作成する。

研究の方法

1 基礎研究

(1) 学習内容の習熟の程度に応じた指導のねらいの明確化

学習内容の習熟の程度に応じた指導における具体的な取組みや実践上の課題を明確にするために、文部科学省の施策である「学力向上フロンティアスクール事業」の研究指定校における研究や都内公立小・中学校の研究等を分析し、習熟のとらえや指導のねらい等について明らかにする。

(2) 学習内容の習熟の程度に応じた指導や資料作成の視点

平成 15 年 12 月の学習指導要領の一部改正に伴い、各教科の内容の取扱いの配慮事項として、「内容の範囲や程度等を示す事項は、(中略)学校において特に必要がある場合は、この事項にかかわらず指導することができること。」との記述が追加された。この記述が追加された教科について、以下の順で学習指導要領及び学習指導要領解説を詳細に分析し、学習内容の習熟の程度に応じた具体的な指導の手だてを明らかにする。

学習指導要領の目標や内容から、学習内容の習熟にかかわる記述を抽出する。

学習指導要領及び解説から、学習内容の定着を図るための配慮事項を抽出し、整理する。
を基に、習熟を図るための具体的な指導の手だてを明らかにする。

なお、学習指導要領に内容の取扱いの配慮事項が追加された教科は、小学校の 4 教科(社会、算数、理科、家庭)と中学校の 6 教科(国語、社会、数学、理科、保健体育、技術・家庭)である。しかし、中学校にのみ追加された教科も、小学校での配慮が必要であると考え、小学校の国語と体育も資料作成の対象とした。

2 実践研究

実践研究では、学習内容の習熟の程度に応じた指導を推進するための資料を基に、検証授業を実施し、指導の具体的な手だての有効性を明らかにした。小学校国語と小学校算数を取り上げた理由は、以下のとおりである。

小学校国語は、学習指導要領の学習内容が 2 学年ごとに大綱的に示されていることから、児童の学習状況の把握が難しいと考えられる。また、東京都における理解や習熟の程度に応じた指導を実践している教科等の割合では、国語が、算数、理科に続き 3 番目に多い教科であること、中学校においては、学習指導要領の一部改正で配慮事項が追加された教科であることから、小学校段階でも、習熟の程度に応じた指導の具体的な手だてを明確にする必要があると考えた。

小学校算数は、各学年の学習内容が明確に示されていることや、学習したことを基に次の学習を行うといういわゆる積み上げ型の教科である。このような教科の特性から、習熟の程度の違いが表れやすい教科であり、学習内容の習熟の程度に応じた指導が最も取り組まれている教科でもある。このようなことから、さらなる指導の改善を目指し、多くの学校が具体的な指導の手だてを必要としていると考えた。

研究の内容

1 学習内容の習熟の程度に応じた指導の明確化

(1) 習熟の程度に応じた指導についての先行研究の分析

指導のねらいについて

学習内容の習熟の程度に応じた指導は、東京都のみならず、全国で取り組みが進められている。文部科学省が行っている「学力向上フロンティアスクール事業」の実践研究の中から、学習内容の習熟の程度に応じた指導に関連する先行研究を分析したところ、ねらいについて次のような傾向があることが分かった。

- ・確かな学力の定着を図ることや、既習事項を生かして自ら問題解決する児童・生徒の育成をねらいとしている。
- ・指導の改善にかかわるねらいとしては、個に応じた学習の手だてや個々の学習状況に応じた適切な支援、個への支援や活動の在り方など、きめの細かい指導を挙げている。

また、このようなねらいを基にして指導することによって、児童・生徒にもたらされる効果としては、つまづきをできるだけ早い段階で解決ができること、自分に合ったペース・方法で指導を受けられること、相談や発表がしやすいこと、自分の解き方や考え方を主体的に見返すことができることなどを挙げている。

具体的な手だて

ねらいを達成させるための指導の工夫について、先行研究や文献を分析したところ単元構成や指導計画、学習集団編成（一斉指導、チームティーチング、習熟の程度を考慮したコース別などを一単元の中で組み合わせる等）、教材・教具、評価、支援等の工夫、発展的な学習や補充的な学習についての工夫等を行うこととしている。

さらにその具体的な手だてとして、単元導入前のチェックテストなど習熟の程度の把握、ヒントカードの活用、ワークシートの活用、少人数による指導、教科サポーターによる支援、読み・書き・計算の習熟を目指す「スキルタイム」の取組み、学習環境整備などが挙げられていた。また、学び方、考え方、判断力、決定力、自己評価力、表現力などの習熟を図り、学習や生活に生かしていけるようにするためには、繰り返し学習を行う中で、知識や技能を計画的にその後の学習や生活の中で活用できるようにすることが大切であるということが分かった。

(2) 本研究における習熟のとらえ

研究を進めるにあたり、研究の根幹となる「習熟」のとらえについて探った。習熟には、「慣れて十分に会得すること」「身に付いた知識」「その人そのものになった方法」「知識と方法（技能）の両側面の熟達、高度化」などの意味がある。ある先行研究では、習熟を、その時点で「あることが分かる」あるいは「あることができる」ととらえていた。また、文献研究からは、「習熟という言葉は、ある知識や技能などがすっかり体の一部として身に付いている状態」というとらえも得られた。これらのことから、習熟とは、「完成された状態を示すもの」ととらえることができる。なお、学習における習熟については、児童・生徒の学習状況の段階を「知る」「理解する」「熟知する」「習熟する」としている文献もある。

以上のことを基に、本研究では、児童・生徒が学習した知識や技能を身に付けている状態で、次の新たな課題に直面した時、その課題を解決するために定着した力を生かすことができることも必要であると考えた。

学習指導要領の記述からは、基礎的・基本的な知識・技能を身に付けているだけでなく、「すべての学習や日常生活に役立ちその向上を図る」「多面的にものを見る力や論理的に考える力など創造性の基礎を培う」「多様な学習活動が展開できるよう」など、発展的に活用する力をはぐくむことの必要性が読みとれる。このように、確かな学力を定着させ、既習事項を生かして自ら問題解決する児童・生徒の育成を目指すことが重要である。

そこで本研究では、「習熟」を以下のようにとらえた。

教科等における基礎・基本を確実に身に付けているだけでなく、新たな課題の解決に活用できること

2 習熟の程度に応じた指導の工夫の基本的な考え方

本来、どの児童・生徒も学習内容を理解し、確実に身に付けるとともに、活用できるようになるはずである。そのために教師は、指導において習熟の程度の違いを生み出さない工夫をしなければならない。しかし、学習内容によっては、ある一定の期間の学習活動が経過した時点で、その学習内容の習熟の程度に違いが生じる現状がある。その習熟の程度に著しい違いが生じた場合に、習熟の程度に応じた学習集団を編成して、効果的な学習を提供することが必要であり、そこで求められるのが、学習内容の習熟の程度に応じた指導の工夫である。

具体例としては、先行研究にも挙げられているように、単元構成や指導計画の工夫、学習集団編成の工夫、教材・教具の工夫、評価の工夫、支援の工夫、発展的な学習や補充的な学習についての工夫などが考えられる。このような工夫を取り入れ、個に応じたきめ細やかな指導を行うためには、児童・生徒の実態を詳細にとらえ、習熟の程度に応じた指導を実施する上での指導体制、指導計画上の位置付け、指導上の工夫を明確にしておくことが必要である。

(1) 指導体制

習熟の程度に応じた指導は、習熟の程度に応じた学習集団編成による指導ととらえがちであるが、一斉授業の中の習熟の程度に応じた指導、ティームティーチングによる指導なども習熟の程度に応じた指導と考えられる。いずれの場合も、児童・生徒の習熟の程度を的確にとらえた指導が求められる。

(2) 実施時期

本来は、毎時間の授業の中で学習内容を習熟及び定着させることが望ましい。しかし、そもそも既習事項の習熟の程度に違いが生じているなど、児童・生徒の学習状況において、一斉指導だけでは困難な場合には、必要に応じて学習内容の習熟の程度に応じた集団を編成するようにする。その実施時期としては、1単位時間、1単元、1学期間などにおいて実施するなどが考えられる。1単位時間の授業において小集団を編成して指導したり、1単元の指導において必要に応じて集団編成をしたり、1学期間の指導において、単元ごとに集団編成を行ったりする。習熟の程度に応じた指導をどこに位置付けるかは、児童・生徒の習熟の程度の実態を的確に把握し、それに応じていくことが重要である。

(3) 指導の工夫

指導に際しては、教科等の基礎・基本を確実に身に付けさせることが大切になることから、学習内容の習熟の程度に応じて、既習事項を振り返らせたり、基礎的な内容に時間をかけたりするなど、柔軟な指導計画を工夫する必要がある。また、習熟の程度に応じて支援を行うことが重要であることから、児童・生徒一人一人の習熟の程度を的確に把握するための評価の工夫が必要である。さらに習熟を図るためには、学んだ基礎・基本が新たな課題の解決に活用できることが大切なことから、教科の特性に着目し、考え方や学び方を身に付けさせるための指導を工夫することなどが重要である。

(4) 習熟の程度のとらえ方

学習内容の習熟の程度に応じた学習活動を適切に展開するために、まず單元ごとの観点別の評価規準を作成し、それを基に学習活動に即した具体的な評価規準を設定して習熟の程度をとらえる。評価規準を設定する際には、学習活動における児童の姿を想定することによって、その学習活動に即した具体的な評価の視点を考える必要がある。さらに、その視点に基づいて指導の手だてを想定し、実際の指導に生かすことが大切である。

3 習熟の程度に応じた具体的な指導の工夫

学習指導要領及び学習指導要領解説を分析し、共通して取り組むべき指導の工夫及び各教科等の特性に応じて取り組む指導の工夫を明らかにした。

(1) 指導計画及び指導方法の工夫

指導計画の工夫としては、単元の学習に入る前に既習事項の定着状況を把握したり、その補充を目的とした学習を指導計画に位置付けたりすることが考えられる。また、単元の学習を進める中では、習熟の程度に違いが出ると予想される段階で習熟の程度に応じた学習集団による指導を位置付けることが考えられる。さらに、単元の学習が終了した後に補充的な学習や発展的な学習を位置付け、基礎・基本の確実な定着を図ったり学習内容を活用する力を育成したりすることが考えられる。例えば、理科において実験・観察を固定化せず、方法別に学習集団を編成し指導することも学習内容の習熟の程度に応じた指導であると考えられる。なお、習熟の程度に応じた学習集団による指導を指導計画に位置付ける場合は、学習集団を固定化せずに、学習のねらいや内容に応じて、一斉指導やチームティーチングなどと組み合わせて計画することが重要である。

(2) 評価の工夫

評価方法としては、児童・生徒の行動観察、作品、ペーパーテストなどがある。評価場面や評価する内容に合わせて、これらの評価方法を組み合わせ、継続して実施していくことが必要である。また、ノートやワークシートの記述を分析し評価することによって、授業中における評価を補充することも有効である。以上のような教師による評価以外にも、児童・生徒による自己評価や相互評価なども参考となる。これらの評価から得た結果を、指導計画の修正や児童・生徒一人一人への具体的な支援の手だてに生かすことで、習熟の程度に応じたきめ細かな指導が実践できるようになる。また、習熟の程度に応じた学習集団を編成する際の資料ともなる。

(3) 教科の特性に応じた活動の工夫

評価規準をもとに習熟の程度を把握することや、指導計画において習熟の程度に応じた指導を意図的に位置付けることは、各教科に共通するものである。一方、実際の習熟の程度に応じた学習活動は、各教科の特性によって異なるのでその特性を十分理解して効果的に行うことが大切である。以下に活動の工夫と教科での具体例を示す。

習熟の程度に応じて教材の内容や教材の提示の仕方を変える。

社会科で社会的なものの見方や考え方を育てるために、単元の始めの段階で提示する資料の種類や提示方法を工夫する。

習熟の程度に応じて学習活動そのものを複数計画する。

理科では、一単元の終末に習熟の程度に応じた学習集団を編成し、学習した内容を確実に定着させるための基礎的な実験を繰り返したり、発展的な実験を行ったりして科学的な見方や考え方を育てるようにする。

習熟の程度に応じて段階的に学習活動を計画する。

体育科、保健体育科では、ボール運動において既習のゲームの攻め方や守り方の学習を生かして、チームごとに攻め方や守り方を考えるなどの段階を踏み、学習内容の習熟を図る。

習熟の程度に応じて学習の場を広げていく。

家庭科、技術・家庭科では、題材の途中や終末で、身に付けた知識や技能を実際の生活で活用したり、そのことをさらに発展させて取り組ませたりする。

検証授業で取り上げることにした小学校国語及び小学校算数については、次のような具体的な指導の工夫を行った。

< 小学校国語 >

国語科の学習指導においては、学習内容の確実な理解及び論理的思考力の育成を図る手だてとして、「書くこと」の習熟を図ることをねらいとした表現活動の工夫を取り入れることにした。検証授業では、自分の考えをもつ指導の工夫と、文章の構成のよさを理解する工夫を取り入れ、児童が自分で表現したいことを主体的に表現することができるようにした。

< 小学校算数 >

算数科は、既習事項を活用して自ら新たな知識や技能を獲得する問題解決的な学習を基盤としている。このような学習活動の特徴をふまえ、計算の仕組みや図形の性質などの知識・理解、作図や計算の仕方などの表現・処理を身に付ける過程で活用される数学的な考え方を育成することに焦点を絞ることにした。数学的な考え方の育成を図るための手だてとして、学習のねらいや内容に応じて、実験や実測を取り入れた体験的な算数的活動や学習した内容を活用して新たな問題を考える発展的な算数的活動を取り入れた。

4 習熟の程度に応じた指導事例

小学校国語

- (1) 単元名(学年) 調べたことを報告しよう(4年)
- (2) 単元の目標 グラフや表を基に、分かったことを整理して書く。
- (3) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く力	言語についての知識・理解・技能
表やグラフから読みとったことを相手に分かりやすく適切な言葉で書こうとしている。いろいろな表やグラフに興味をもち、進んで分かったことを書こうとしている。	表やグラフから分かった内容を整理し、報告する文章を書くことができる。	「一つめ・二つめ」など書き出しの言葉を工夫する。句読点、段落、つなぎ言葉に気を付ける。

(4) 習熟を図るための手だて

指導計画の工夫 (p.114 指導計画の形態を参照)

単元構成の工夫として、一斉指導(第1時から第3時)では、報告文を書く上での構成の特徴や書き方の工夫について学ぶ時間を設定した。また、習熟の程度に応じた指導(第4時から第6時)では、既習事項を活用して新たな課題の解決に活用できること目的とした。

評価の工夫 (p.114 指導計画の評価規準と p.115 補充コースの指導の展開を参照)

ア 各時間の具体的な評価規準の設定

児童の学習状況を的確に把握するための手だてとして、各時間ごとに学習内容に応じて評価規準を設定した。また、習熟の程度に応じた支援を明らかにして指導に生かすことができるようにした。

イ 評価シートの活用

評価規準に基づいて児童の学習状況を把握し指導に生かすために評価シートを活用した。また、児童がコース選択する際に評価シートの記録をもとに助言できると考えた。

ウ 学習振り返りカードを活用したオリエンテーションの時間の設定

学習振り返りカードは、言語についての知識・理解・技能だけでなく、国語への関心・意欲・態度や書く力も振り返ることができるようにした。また、児童がコース選択に悩んだり、適切な選択ができなかったりするときは、個別にコースの学習内容を説明したり、学習状況を評価シートを用いて説明したりするなどの支援をすることにした。

表現活動の工夫 (p.115 補充コースの指導の展開を参照)

ア 自分の考えをもつ指導の工夫

論理的思考力を育てるためには、事実や事象を根拠として、自分の考えや意見をもつことが重要である。そこで、自分の考えや意見がもてるように生活体験・学習体験に基づいたグラフを提示した。また、資料の読み取り方を指導したりヒントカードを用意して自分の考えや意見をもたせたりした。

イ 文章の構成を理解する工夫

段落ごとに、書く内容が分かるようなヒントカードを用意したり、既習以外にも自分の考えが表現できるような数種類の構成表を用意したりすることで、文章の構成のよさに気付くようにした。

指導計画

時形態	学習内容	各時間のねらい 主な学習活動 論理的思考力を育てる表現活動	評価規準 主な支援 (A B C)						
1	(相手・目的) 相手や目的に応じて適切に書くこと。 (取材) 書く必要のある事柄を収集したり選択したりすること。	2つのグラフを比べて分かったことを書くことができる。 何を表しているグラフが確認する。 グラフから読み取ったことを報告する相手を明確にする。 グラフから読み取ったことを発表し合う。 2つのグラフを比較して読み取る。 分かったことを根拠として自分の考えや思いを表現する。	2つのグラフを比べて、数値や項目の違いに気付き、分かったことを書くことができる。 C 2つのグラフを比べて、数値や項目の違いが分かるようにする。 B 2つのグラフを比べて、数値や項目の変化に注目し、分かったことから考えたことを書くことができるようにする。 A 2つのグラフを比べて、数値や項目の変化に注目し、考えたことを2つ以上書くことができるようにする。						
2・3	(構成) 自分の考えが明確になるように段落相互の関係を考えること。 (記述) 書こうとするものの中心を明確にしなが段落と段落との続き方に注意して書くこと。	グラフから読み取ったことを文章に表すとき、どのような書き方をすれば読み手にとって分かりやすいかを考えて書くことができる。 文章の構成や書き方の特徴や工夫点を整理し、グラフから読み取った内容を文章に表す。 例文に続けて「二つめ」「三つめ」を書き加える。 「終わり」に書く内容を確認し、報告文を書き終える。 例文をもとに文章を書くときの構成や書き方の特徴や工夫点を理解し表現する。	(構成) 書き方の特徴や工夫点を例示から挙げるができる。 (記述) 段落と段落のつながりを考えて、文章の続きを書くことができる。 C 書き方の特徴や工夫点を例示から抜き出せるようにする。 B 書き方の特徴や工夫点を例示以外に既習内容や経験から考えるようにする。 A 書き方の特徴や工夫点を例示以外に既習内容や経験から2つ以上考えるようにする。						
学習振り返りカードを活用したオリエンテーション									
4	(相手・目的) 相手や目的に応じて適切に書くこと。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="width: 25%;">補充コース</th> <th style="width: 25%;">基礎・基本コース</th> <th style="width: 25%;">発展コース</th> </tr> <tr> <td>表やグラフから読み取ったことをカードに書くことができる。</td> <td>教師が用意したグラフから相手や目的を意識して、分かったことや考えたことをカードに書く。</td> <td>教師が用意した2種類のグラフから相手や目的を意識して選択し、分かったことや考えたことをカードに書く。</td> </tr> </table> <p>グラフから分かったことを根拠として自分の考えや意見を表現する。</p>	補充コース	基礎・基本コース	発展コース	表やグラフから読み取ったことをカードに書くことができる。	教師が用意したグラフから相手や目的を意識して、分かったことや考えたことをカードに書く。	教師が用意した2種類のグラフから相手や目的を意識して選択し、分かったことや考えたことをカードに書く。	(相手・目的) 相手や目的を意識しながら書く必要のあることをカードに書いてい。 C 相手や目的を明確にできるワークシートを用意する。 グラフの読み取り方を指導しながら書くことができるようにする。 B 相手や目的を明確にできるワークシートを用意する。 書く必要のあることを分かったことや考えたことを分けてカードに書くことができるようにする。 A 相手や目的を明確にできるワークシートを用意する。 書く必要のあることを分かったことや考えたことを分けてカードに書くことができるようにする。
補充コース	基礎・基本コース	発展コース							
表やグラフから読み取ったことをカードに書くことができる。	教師が用意したグラフから相手や目的を意識して、分かったことや考えたことをカードに書く。	教師が用意した2種類のグラフから相手や目的を意識して選択し、分かったことや考えたことをカードに書く。							
学習集団編成の工夫と第4時の指導計画は次ページに示す。									
5・6	(取材) 書く必要のある事柄を収集したり選択したりすること。 (構成) 自分の考えが明確になるように段落相互の関係を考えること。 (記述) 書こうとするものの中心を明確にしなが段落と段落との続き方に注意して書くこと。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="width: 25%;">文章の構成について理解し報告文を書く。</th> <th style="width: 25%;">既習の例文をもとに相手を意識しながら文章を書く。</th> <th style="width: 25%;">書こうとする中心や段落相互の関係を考えながら文章を書く。</th> </tr> <tr> <td>段落と段落の続き方に注意して書く。 構成表を仕上げ報告文を書く。</td> <td>既習の例文をもとに相手を意識しながら文章を書く。 構成表を仕上げ報告文を書く。</td> <td>書こうとする中心や段落相互の関係を考えながら文章を書く。 選択した構成表を仕上げ報告文を書く。</td> </tr> </table> <p>相手が理解しやすいように中心を意識して文章を書く。 段落相互の関係を明らかにして文章を書く。</p>	文章の構成について理解し報告文を書く。	既習の例文をもとに相手を意識しながら文章を書く。	書こうとする中心や段落相互の関係を考えながら文章を書く。	段落と段落の続き方に注意して書く。 構成表を仕上げ報告文を書く。	既習の例文をもとに相手を意識しながら文章を書く。 構成表を仕上げ報告文を書く。	書こうとする中心や段落相互の関係を考えながら文章を書く。 選択した構成表を仕上げ報告文を書く。	(取材) 自分や他の児童がよみ取ったことの中から自分の考えが明確になるカードを選択することができる。 C 他の児童の意見を聞いたり、教師が用意したヒントカードを参考にしたりして、書こうとする内容が集められるようにする。 B 他の児童の意見を聞いたり、教師が用意したヒントカードを参考にしたりして書こうとする内容を集め、選択できるようにする。 A 目的に照らして書く必要のある事柄がどうかカードを選択して、必要に応じて他の児童の考えを生かしたり新たにカードを付け加えたりすることができるようにする。 (構成) 自分の考えが明確になるように段落や段落相互の関係について考えることができる。 C 第2、3時のワークシートを使って構成について思い出すとともに、段落ごとに文章の構成がとらえやすいワークシートを用意し、書く内容を明確に分かるようにする。 B 他の児童の意見を生かしながら、自分の考えが明確になるようなカードを選択できるようにする。 A 既習以外の数種類の構成表を用意し、自分の考えが明確になるようなものを選ぶようにする。 (記述) 書こうとするものの中心が明確になるように段落と段落との続き方に注意して書くことができる。 C 相手に自分の考えが伝わるように書く順番を考えて書くことができるようにする。 B 相手に自分の考えが伝わるように書く順番を考えたり、指示語や接続語を適切に使ったりして書くことができるようにする。 A 自分が選択した構成表にそって、指示語や接続語を適切に使いながら書くことができるようにする。
文章の構成について理解し報告文を書く。	既習の例文をもとに相手を意識しながら文章を書く。	書こうとする中心や段落相互の関係を考えながら文章を書く。							
段落と段落の続き方に注意して書く。 構成表を仕上げ報告文を書く。	既習の例文をもとに相手を意識しながら文章を書く。 構成表を仕上げ報告文を書く。	書こうとする中心や段落相互の関係を考えながら文章を書く。 選択した構成表を仕上げ報告文を書く。							
7	(推敲評価) 文章のよいところを見付けたり、間違いなどを正したりすること。	書き上がったものを読み合い自己評価・相互評価をする。 報告文を読み合う。 事実に基づいて書かれている文章かどうかを見直す。	(推敲評価) グラフから分かったことや考えたことを分かりやすく発表することができ、他の児童の文章のよさに気付くことができる。 C 他の児童の文章を読んで分かったことをカードに書くようにする。 振り返り表をもとに自己評価できるようにする。 B 他の児童の文章を読んで分かったことや考えたことをカードに書くようにする。 振り返り表をもとに自己評価できるようにする。 A 他の児童の文章を読んで分かったことや考えたことを積極的にカードに書くとともに、今後の文章を書くときの参考にできるようにする。 振り返り表をもとに自己評価し、今後の学習に生かせるようにする。						

学習振り返りカードを活用したオリエンテーションの時間（第3時後）

コースの選択をアドバイスするときのポイント

習熟の程度に応じた学習集団を編成するためには、児童自身がこれまでの学習状況を自覚すること、教師は児童一人一人の学習状況を的確に把握することが重要である。その上で、教師は各コースの学習のねらいや内容・方法を児童に正確かつ具体的に伝え、児童がさらに自分の力を伸ばすという視点で選択できるようにする。

評価シート		評価	次時の具体的支援
児童名	学習状況と対応した支援		
児童1	ヒントカードを配布した。「終わり」に書く内容を一緒に考えた。	C	既習事項を再度学習するとともに、グラフから事実を一緒におさえていく。自分の考えや意見がもてるようにヒントカードを配布する。
児童2	文章の組立てをしっかりと理解し、自分の考えを報告文に書き込むことができた。	A	グラフや表を多面的に見る力を伸ばし、自分の考えや意見を書くことができるようにする。

学習振り返りカード

この単元で、今まで学んできたことをよく思い出して、書きましょう。

[3...たいへんよく] [2...よく] [1...もう少し] を表します。

国語への関心・意欲 態度をみるための 質問事項	グラフから、いろいろなことを読み取ろうと思いましたが。-----	3	2	1
	グラフから読み取ったことを、読む人に分かりやすく書こうと思いましたが。-----	3	2	1
	分かったことをもとに、自分の考えや意見を書こうと思いましたが。-----	3	2	1
	グラフから読み取ったことを、3つ以上メモすることができましたか。-----	3	2	1
書く力をみるための 質問事項	読み取ったことを、「一つめは」「二つめは」のように、かじょう書きにして文章にまとめることができましたか。-----	3	2	1
	分かったことをもとに、自分の考えや意見をもち、書き加えることができましたか。-----	3	2	1
言語についての知識・理解・技能をみるための質問事項	自分の文章を読み直して、まちがいを直そうと思いましたが。-----	3	2	1

学習振り返りカード記入後、オリエンテーションで各コースの学習内容を説明

習熟の程度に応じた学習集団（第4時）

	基礎・基本コース	発展コース
補充コース	<p>教師が用意したグラフ（ごみの量の変化）から相手や目的を意識して、分かったことや考えたことをカードに書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ごみの量の変化」のグラフを提示し、自分の考えがもてるようにする。 グラフの読み取り方を既習事項を振り返りながら確認する。 分かったことや考えたことが書けない児童には、ヒントカードを与える。 児童の気付きを共有するために分かったことや考えたことを発表し合う。 	<p>教師が用意した2種類のグラフ（ごみの量の変化・交通事故の変化）から相手や目的を意識して選択し、分かったことや考えたことをカードに書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> 多面的な資料の見方や考え方について指導する。 「ごみの量の変化」「交通事故の変化」のグラフを提示し、自分の考えがもてるようにする。 相手や目的を意識しながらグラフを選択する。 児童の気付きを共有するために分かったことや考えたことを発表し合う。

補充コースの指導の展開（第4時）

主な学習活動	指導事項	評価規準	評価方法	支援
本時のねらい・・・グラフから読み取った分かったこと、考えたことをカードに書こう。				
<p>「ごみの量の変化」のグラフの読み取り方法を学習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 横軸、縦軸は何を表しているか理解する。 グラフをもとにごみの量の変化についてみんなで確認する。 <p>相手や目的を明確にする。</p> <p>グラフから分かったことや考えたことをカードに記入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> グラフから分かったことをカードに書く。 分かったことからどのようなことが考えられるのかカードに書く。 <p>カードに書いたことを発表する。</p>	<p>学習の終末に報告会を開くことを伝え、意欲をもてるようにする。</p> <p>児童一人一人がグラフの読み取りができるよに一つ一つ全員で確かめる。</p> <p>相手や目的を明確にできるようにする。</p> <p>相手...学級の友達 目的...学習の終末の報告会</p> <p>分かったことや考えたことをカードに書く視点を記したヒントカードを必要に応じて配布する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>自分の考えを引き出す ヒントカードの内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の生活から考える。 将来のことを考える。 自分ができていることを考える。など <p>他の児童の発言でよいと思うところを書き留めるように指導する。</p> </div>	<p>既習事項を振り返りながらグラフの基本的な読み取り方を丁寧におさえていくようにする。</p> <p>既習の内容を生かすことができるようなグラフを用意する。また、自分の考えがもてるように「ごみの量の変化」のグラフを用意する。</p> <p>前時までの実態を基にして個々の課題が解決できるように机間指導しヒントカードを配布する。</p> <p>相手や目的を意識しながら、書く必要のあることをカードに書いている。</p> <p>カード、行動観察</p>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>論理的思考力を育てる活動</p> <p>グラフから分かったことを根拠として、自分の考えや意見を書く活動</p> </div>				

表現活動の工夫

- 生活体験や他教科等と関連させた資料を用意し自分の考えや意見をもたせる。
- 相手や目的が明確になるような場面の設定をする。
- 視点を記したヒントカードを必要に応じて与え、事実に基づいて自分の考えをもたせる。

評価の工夫

- 各時間ごとに設定した評価規準をもとに、児童の学習状況を把握する。
- 学習状況や具体的な支援を記入した評価シートを活用し、評価を指導に生かす。
- 児童一人一人の学習状況を予想し、具体的な支援を考える。

(5) 考察

指導計画の工夫

指導計画全7時間のうち、第1時から第3時は、基礎的・基本的な学習内容の定着を目的として報告文を書くときの構成や書き方の工夫・特徴について一斉授業を行った。

第4時から第6時は、3コースの学習活動を設定し、習熟の程度に応じた学習集団を編成した。そこでは、前時までに学んだ報告文の書く力の実態に応じた学習活動を設定し、それぞれの程度に応じた支援を行ったので、既習事項を活用して新たな課題を解決することができた。

評価の工夫

第3時の後、学習振り返りカードを活用することで、児童自身が言語についての知識・理解・技能だけでなく、国語への関心・意欲・態度や書く力も振り返ることができた。

授業時の児童の学習状況とそれに対応した支援を評価シートに記すことで、教師が児童一人一人の学習状況を分析し、次の授業準備の際、習熟の程度に応じた指導の手だてを考えることができた。また、授業中においては習熟の程度に応じてヒントカードを配ることができたので、グラフの読み取り方をより詳しく指導する等、個々への具体的な支援を行うことができた。

また、児童がコース選択をする際に、児童自身が記述した学習振り返りカードを活用したり、教師が各コースの学習内容や方法について詳しく説明したりしたので、児童自身でコースを選択することができた。教師が、学習振り返りカードの記述内容や評価シートをもとに児童に助言したことも、児童が適切にコースを選択するために有効であった。

これらのことから、児童の自己評価や相互評価が生きる場面を設定し、授業の場面に応じた評価シートを活用して支援することが、習熟の程度に応じた学習集団を編成するために必要であることが分かった。

表現活動の工夫

読み取ったことを自力で文章にするような時間を設定し、文章の構成の大切さに気付かせた。その後、段落相互の関係を明らかにできるカードや構成表を使って書いたため、グラフから分かったことを根拠として自分の考えや意見を表現する大切さを理解できた。また、単元の最後の時間に学習報告会を行うことを児童に伝え、報告文を書く相手や書くことの目的を明確にして学習の見通しをもたせたことは、学習の意欲付けに有効であった。

グラフについては、他の教科でも学習した内容であり、児童にとって身近な題材のものを用意した。グラフの読み取り方を確認し、ヒントカードも活用したことから、グラフに興味・関心をもちやすく、既習事項を生かして書くことに取り組むことができた。今後さらに、児童が自力で読み取りやすい資料の開発が必要である。教師が数種類のヒントカードを作成し、児童の学習状況に応じて配布すると、児童がヒントカードを基に自分の考えや意見をもつことができ、自分の生活にあてはめて考えることができた。しかし、ヒントカードだけでは自分の考えを書き表すことができず、繰り返し支援を必要とする児童もいたので、提示方法も個々に応じた工夫が必要である。

小学校算数

- (1) 単元名(学年) 比例(6年)
- (2) 単元の目標 比例の意味について理解し、比例の関係から表やグラフの特徴をよみ取るなどの学習を通して関数の考えを一層伸ばす。

(3) 評価規準

算数への関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形についての表現・処理	数量や図形についての知識・理解
比例関係に着目するよさに気付き、日常生活の中の伴って変わる二つの数量の中から比例関係にあるものを見いだしたり、問題の解決に進んで活用したりしようとする。	伴って変わる二つの数量の関係について考え、比例関係になるものを根拠をもって見つける。	比例関係にある二つの数量の関係を、表やグラフに表すことができる。 比例関係の表やグラフをよむことができる。	比例の意味や性質、関係を表す表やグラフについて理解している。

(4) 習熟を図るための手だて

指導計画の工夫

ア 単元構成の工夫 (p.118指導計画の第1時を参照)

既習事項の習熟の程度に応じるために、第1時に既習事項を振り返る学習等を行った。さらに、評価シートの活用により一人一人の習熟の程度を的確に把握し、指導計画の作成等を行った。

イ 複数の指導計画の作成と児童の実態に応じた選択 (p.118学習形態を参照)

既習事項の習熟の程度を想定し、それに応じた指導計画を2種類作成した。習熟の程度の違いが大きい場合は、比例の意味指導まで一斉指導を行い、その後、習熟の程度に応じた学習集団による指導を行う。また、習熟の程度の違いがそれほど大きくない場合は、単元の学習内容が終了するまでは一斉指導を行い、最後に習熟の程度に応じた学習集団による指導を実践する。本事例では、児童の実態を基に後者の指導計画を使用した。

評価の工夫 (p.118指導計画の評価規準を参照)

ア 評価シートの結果を分析し、一人一人に対して学習内容に応じた支援を明らかにした。

イ 学習内容の定着の状況に応じて複数のヒントカードや発展的な課題を作成した。なお、ヒントカードは内容を工夫するとともに、定着の状況に応じ提示の仕方も工夫した。

ウ 習熟の程度に応じた学習集団を編成するために、学習内容の定着状況を評価した。また、児童が適切な学習集団を選択できるように、学習内容の定着状況を児童に示すとともに一人一人に対して個別に助言を行った。

算数的活動の工夫 (p.118指導計画を参照)

数学的な考え方を育て学習内容の確実な定着を図るために、単元全体に学習のねらいや内容に応じた算数的活動を取り入れた。

活動の目的	活動の実際	
2つの数量の対応や変化をいろいろな視点で観察する。	表やグラフに表す活動、比例関係を活用した能率的な測定、表から言葉や文字を使った式に表す活動	
比例の意味理解を深める	作問をする場面を設け、具体的場面と表・グラフ・式の関連を図る活動	
教具の工夫		
	ねらい	教具の活用
第2時	伴って変わる2つの数量の意味理解	ブラックボックスの活用
第3時	比例の意味理解[伴って変わる2つの数量(時間と水の深さ)の関係の考察]	電動ポンプと水槽を活用した実験
第4時	比例の性質の理解の定着	比例の性質を活用したゲーム
第6・7時	問題解決への比例の性質の活用(実際の長さや重さの体感)	針金・紙・トイレットペーパーなどの具体物の活用

指導計画

時	形態	学習内容	各時間のねらい 数学的な考え方を育てる算数的活動	主な学習活動	評価規準 主な支援 (ABC)			
1	30分	一斉	既習事項の復習	比例の学習に関連する既習の学習に取り組み、確実な理解を図る。 比例の学習に関連する既習の問題に取り組む。	比例の学習に関連した既習事項について確実に理解している。(発言、ワークシート) C 数直線やキーワードなどを記したヒントカードを配布し見方や活用の仕方などを説明する。 B 必要に応じてヒントカードを配布し自力解決を促す。 A 2量の関係を扱った発展的な課題を用意する。			
2	45分		比例の意味について理解すること	自分の身の回りの中から伴って変わる2量を見付け、それらの数量の変化について考える。 対応の決まりを考える。 身の回りから伴って変わる2量を探し、その関係を調べる。 日常生活の中から伴って変わる2量を見付け出しその関係を根拠をもって考える。	伴って変わる2量の関係から決まりを見いだしている。(発言、ワークシート) C 2量の関係を比など既習の学習から探そう助言する。 C1あたりいくつになるというような具体的な生活の場面を示す。 B 既習事項を基に2量の関係を根拠をもって説明しよう助言する。 A 2量の関係から決まりを見つける発展的な課題を用意する。			
3	45分		伴って変わる2量の決まりを表から考え、比例の意味を理解する。 水槽に水をはる実験から2量の関係を表にする。 表から、変わり方の決まりについて考える。 比例の意味を知る。 伴って変わる2量を、表などを基に調べ関係を考える。 伴って変わる2量が比例であるかどうか根拠をもって判定する。	伴って変わる2量の関係を表に表すことができ、比例の意味を理解している。(ワークシート) C 比例の意味を理解できるよう表の倍関係に着目するヒントカードを配布し自力解決を促す。 B 表を対応・変化に着目し性質を探そう助言する。 A 比例の関係を判定する発展的な課題を用意する。				
4	45分		比例する2量の関係を多様な見方で調べ考える。 表から比例の性質を見つける。 比例の関係を、言葉、記号などを使った式に表す。 比例する2量の関係を表したカードから等しいものを探す比例カードゲームを行う。 (1つの比例に対し4種類のカードを用意する) 表の数値の変化や対応の関係に着目し、多様な見方で調べたことを根拠をもって説明する。	比例する2量の関係を対応する数値の商に着目したり、変化の倍関係に着目したりするなど多様な見方で考えている。(発言、ワークシート) C 倍関係や対応する数値の商が一定であることに着目するヒントカードを配布し自力解決を促す。 B 式にして表す際には、2量の関係の決まりに着目しよう助言する。 A 式と表の関係を根拠をもって説明しよう促す。				
5	60分		表やグラフを用いて比例の特徴を調べること	比例の関係をグラフに表すことができる。 比例の関係を表したグラフから特徴を考える。 2量の関係を表を基にグラフをつくる。 グラフから、比例の特徴をよみとる。 比例学習の習熟を図る問題を行う。 比例の表などをグラフに表し調べる。 表、グラフなどを関連付けて考える。	表から2量の関係をとらえ、グラフに表すことができる。(ワークシート) グラフから比例の特徴(原点を通る直線になることなど)を見付けている。(発言、ワークシート) C グラフから特徴がよみとれない児童が多ければ、必要に応じて一か所に集め、特徴についての指導を小集団で行う。 B 特徴の理由が書けない児童には、第3時の実験を振り返るよう助言する。 A 発展的な課題で式や表、グラフを互いに関連付けて考えられるよう助言する。			
6	45分	第5時の学習集団編成の工夫と第6時の指導計画は次ページに示す						
7	45分	習熟の程度に応じた学習集団	補充コース	基礎・基本コース	発展コース	補充コース	基礎・基本コース	発展コース
			既習の比例の性質を用い問題を解決する。 トイレットペーパーの長さや重さの関係を調べる。 比例の性質を用い50mの重さと20gの長さや重さを求める。 発展的な課題(1巻きの長さを測る方法を考え調べる。)に取り組む。 既習の比例の性質を用い解決の見通しを立てて問題に取り組む。	紙の重さを調べる実験を行い、比例の理解を深める。 既習の比例の性質を用い、紙の重さを調べる方法を考えて実験する。 グループごとに解決の方法を考える。 実験結果を話し合う。 比例の性質を活用して、紙の重さを調べる。	問題を解決したり、作問したりしながら比例の理解を深める。 小数の場合でも比例の性質が適用できるか調べる。 比例の理解を深めるために作問をしたり解き合ったりする。 伴って変わる2量の関係が比例の関係であることを見だし、問題解決する。	比例の性質を活用して問題を解くことができる。 は各コースの児童の学習状況に応じた支援の一例 倍関係や対応する数値の商が一定であることを着目するヒントカードを配布し自力解決を促す。 比例の定義、性質を活用して問題解決をすることが難しい児童が多ければ、小集団で定義、性質の活用の仕方を指導する。	比例の性質を活用して、紙の重さを求めることができる。 倍関係や対応する数値の商一定、グラフなど比例の性質に着目するヒントカードを活用したりグループで考えを確かめたりすることで、様々な解決方法に気付くようになる。	比例の性質を活用し、問題の解決の仕方を適切に考えている。 数値が小数になっても、比例の性質が成り立つことを導きだせるようにヒントカードを用意する。

学習集団編成の工夫の例

- 各コースで学習する内容を明確に児童に提示する。
- 学習内容の定着状況を評価する問題を基にコース選択をするように促す。(問題作成は4観点をバランスよく取り入れる。) 学習内容の定着状況の評価(第5時)で数学的な考え方の定着状況を把握する問題例

1mで150円のリボンがあります。リボンの代金は長さに比例しています。比例していることを表やグラフなど、できるだけたくさんの方で表し、説明しましょう。

- 本時までの教師の評価と児童のコース選択が一致しない場合には、個別に助言をする。
- 最終的なコース選択は児童が行う。

評価シートの活用と支援の具体(第6時での活用例)

前時までの評価シートをもとに、個別に支援計画を立て、個に応じた指導に生かす。

評価シート 第6時		評価の観点		自己評価	
児童の学習状況と指導上の留意点	児童名	表処	発展	表処	感想
1時より：かけ算A、倍C、式化C、グラフA 比例の性質の理解があいまいで活用できていない。 ヒントカードを活用できていない。問題解決時、 ヒントカード1を配布しカードの見方を説明する 必要がある。	児童 1	B	B	A	
まじめに取り組むが理解が難しい。かけ算2桁× 1桁はできるが、逆はできない。 個別支援が必要。	児童 2	B C	C	A	

ヒントカード、学習形態などの手だて

- 比例の定義を使って比例の判定が難しい児童には、ヒントカードを配布し自力解決を促す。
- カード1 比例の定義を言葉と図で分かりやすく示したカード
- カード2 比例の定義以外の性質で比例の判定ができない児童に、多様に見るためのヒントカードを配布する。
- カード2 表を縦に見たときの商一定の性質を言葉と図で分かりやすく示したカード

比例の判定が定義を活用してできない児童が多い場合は、一カ所に集め、小集団で具体的な活用例を示すなどの指導を行う。小集団の指導で理解が図れない場合は、カードを活用し個別指導を行う。

評価シートを毎時間活用することで、コース別に分かれた際も、誰にどのヒントカードを配布するかなどの支援計画が立てやすくなり、個に応じた支援ができるようになる。

習熟の程度に応じた学習集団による指導の実例(第6時)

	基礎・基本コース		発展コース									
	ねらい 主な学習活動 主な算数的活動	評価規準 主な支援	ねらい 主な学習活動 主な算数的活動	評価規準 主な支援								
補充 コース	<p>比例の問題を解いたり、作問したりしながら、比例の性質の理解を深める。 既習の比例の性質を活用し問題を解決する。 比例に関する作問をし、友達と解き合いながら、比例に対する理解を深める。</p> <p>比例の性質を活用した作問をする。</p>	<p>比例の性質を活用し、問題の解決の仕方を考えている。 作問の手がかりとなるヒントカードを用意する。早く解決した児童には違うデータで作問するように促す。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>カード1 表</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">()</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">1</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">3</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">6</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">()</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">5</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">15</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">30</td> </tr> </table> </div> <p>他にカード2 グラフ カード3 式 カード4 データ を用意した。</p>	()	1	3	6	()	5	15	30	<p>比例関係を用いた測定を行う力を伸ばす。</p> <p>針金の重さが針金の長さに比例していることを確認する。 実験の結果をグラフに効率よく表す方法を考える。</p> <p>針金の長さを調べる実験から問題を見だし、既習の比例の性質を活用し問題解決をする。</p>	<p>比例の性質を活用して、針金の重さを求める方法を考えている。</p> <p>発展的な課題を提示し、実験の結果をグラフに表し、そのグラフをもとに、発展的な課題を考えるよう促す。</p>
()	1	3	6									
()	5	15	30									

補充コースの指導の展開(第6時) ねらい 既習の学習を振り返り、比例の性質の理解を深め、定着を図る。

主な学習活動	主な算数的活動	評価規準	主な支援(A B C)														
<p>既習の内容を思い出し、比例の性質を活用して問題に取り組む。</p> <p>(1) 1枚2円の色紙を一人に1枚ずつ配りました。枚数と代金の関係を表に表し、比例しているかどうか調べましょう。また理由も書きましょう。</p> <p>類似の問題に取り組む。</p> <p>(2) 1枚6円の千代紙を一人に1枚ずつ渡しました。枚数と代金の関係を表に表しましょう。また、このクラス全員に配ったらいくらになるでしょうか。</p> <p>(3) 次の表について比例しているかどうか調べましょう。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">時間(分)</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">1</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">2</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">3</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">4</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">5</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">6</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">深さ(cm)</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">7</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">14</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">21</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">28</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">35</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">42</td> </tr> </table> <p>2量の関係を理由を明らかにして説明する。(比例の判定) 比例の性質を活用し問題に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> 比例の関係を表す表を完成する問題学習を振り返る。 身の回りや今まで学習したことには比例の関係であることがたくさんあることに気付くようにする。 <p>B 早く問題解決した児童には類似の練習問題を用意する。 A 練習問題が早く終わった児童のために数値の桁数を増やし難しくした発展問題を用意する。</p>		時間(分)	1	2	3	4	5	6	深さ(cm)	7	14	21	28	35	42	<p>比例の定義を活用して2量の関係をとらえている。</p> <p>C 比例の性質を理解し、定着するように、性質を理解しやすい容易な問題から、徐々に難しくした問題に繰り返し取り組めるようにする。</p> <p>(1) 数値を簡単にした分離量を扱う問題。 (2) 数値をやや難しくした分離量を扱う問題。 (3) 数値をやや難しくした連続量を扱う問題。</p>	<p>段階的な問題の提示</p> <p>C 解答の例を示す。答えの確認は一つ一つ根拠を明らかにして全体で行う。 ・2量の関係の調べ方が理解できるよう(1)は全体で取り組む。(2)(3)は自力解決中心で取り組む。 ・比例の定義を用いて2量の関係を調べられるよう、ワークシートに理由の書き出しをあらかじめ書いておく。答えを発言する際にはその理由も発表させる。</p>
時間(分)	1	2	3	4	5	6											
深さ(cm)	7	14	21	28	35	42											

発展的に考える問題の提示

解答の例示や
答えの確認の仕方

(5) 考察

指導計画の工夫

第1時に比例に関連する既習事項を振り返る学習を設定することにより、既習事項の習熟の程度の違いを補うことができた。

また、この第1時の学習の結果を基に、習熟の程度を把握したことにより、より児童の習熟の程度に応じた指導計画を選択することができた。

評価の工夫

児童の習熟の程度やつまずきの傾向を把握するために、毎時間、評価シートを活用した。ヒントカードや発展的な課題の作成など、児童の習熟の程度に応じた指導を行うための手だてを明確にすることができた。

第1時の学習では、折れ線グラフを作成する際に座標が取れなかったという児童の実態を評価シートから見取った。そこで、第5時の表からグラフを作成する学習においては、座標の取り方を指示したヒントカードを作成したり、助言の内容を検討したりした。実際の学習の場面では、こうして作成したヒントカードを活用して自力解決する児童の姿が見られた。このことから、評価シートを活用することは、個々の児童の学習内容の定着状況を事前に把握して指導を行うことができ、児童のつまずきを想定した具体的な支援を行うことができることが分かった。

児童の習熟の程度に応じた学習集団を編成するにあたっては、知識・理解だけではなく、数学的な考え方を含めて学習内容の定着状況を評価した。その結果、知識・理解に関する習熟の程度にはあまり違いがない場合でも、数学的な考え方に関する習熟の程度には違いがある場合もあった。このことから、数学的な考え方を含めて学習内容の定着状況を評価することで、より児童の習熟の程度に応じた学習集団を編成することができることが分かった。

算数的活動の工夫

第3時では、電動ポンプを使って水槽に水を汲み上げる実験を行うことにより、伴って変わる二つの数量の変化の決まりを見いだす活動をした。このことは、第4時の比例の性質を見つける学習においては、時間とともに増え続ける水槽の水の様子をイメージすることで、表に表された数値も一定に変化しているということに気付くことにつながった。また、第5時の比例の関係をグラフに表す学習においては、この実験をイメージすることで表に表されていない数値についてもグラフに表すことができた。

本単元で行った算数的活動は、授業中の児童の発言やワークシート及び自己評価の記述から判断すると、児童の自力解決を促す上で有効であることが分かった。さらに、学習の目標や内容を詳細に分析し、数学的な考え方を育てる上で効果的な算数的活動を開発していくことが必要である。

研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 学習内容の習熟の程度に応じた指導の在り方

本研究では、習熟を「教科等における基礎・基本を身に付けているだけでなく、新たな課題の解決に活用できること」ととらえ、研究を進めてきた。各時間の学習内容に応じて具体的な児童の姿を想定して学習を進めることは、児童・生徒の学習状況を詳細に把握することにつながるとともに、的確な支援を行うことに有効であった。

また、小学校国語及び算数で実施した検証授業の分析から、学習内容の習熟の程度に応じた指導の在り方を次のようにまとめた。

- ・ 学習する内容を観点別評価規準等から詳細に整理し、それにかかわる既習事項の習熟の程度を把握することが必要であること。
- ・ 児童・生徒の実態に応じて学習内容の習熟の程度に応じた学習集団での学習を、単元や1単位時間にどう位置付けるか等、指導計画の工夫をすること。
- ・ 1単位時間の具体の評価規準を設定しそれを活用して、児童・生徒の学習状況を的確に把握し、一人一人の児童に適切な支援を素早く効率的に行い、学習内容の確実な定着を図ること。
- ・ 児童・生徒の学習内容の習熟の程度に応じて、補充的な学習や発展的な学習を取り入れること。

さらに、検証授業において具体的な手だてとして、ヒントカードの活用とその具体的な提示の仕方、少人数指導の活用の仕方等を盛り込んだ指導事例を作成することができた。

(2) 習熟の程度に応じた指導を推進するための資料の作成

先行研究や学習指導要領及び学習指導要領解説を分析することで、習熟の程度に応じた指導を実践するための資料を作成した。学習内容や学び方、配列など教科の特性を分析することにより、習熟の程度に応じた指導の具体的な手だてを示すことができた。

2 今後の課題

(1) 習熟の程度のとらえについて

習熟や習熟の程度のとらえについて、本研究では児童・生徒の学習状況の具体的な姿として示したが、各教科の学習内容を踏まえて示すことは十分ではなかった。さらに研究を深めていく中で、習熟のとらえを教科等の学習内容を基に具体的にする必要はある。

(2) 習熟の程度に応じた指導の工夫について

本研究では、研究対象を限定して習熟の程度に応じた指導の工夫等を示した。しかし、習熟の程度に応じた指導は、すべての教科において求められることから、研究対象を広げていく必要がある。

資料 「学習指導要領に見られる習熟等にかかわる記述とその具体的な指導の工夫」

学習指導要領に見られる習熟等にかかわる記述とその具体的な指導の工夫の資料作成の意図

学習指導要領における習熟にかかわる記述を明確にする。

学習指導要領解説等における習熟を図るための配慮事項を整理する。

から習熟を図る視点と具体的な手だてを分析する。

習熟の程度に応じた指導を推進するために各教科の特性を把握する。

小学校

教科 国語	学習指導要領に見られる「習熟」等にかかわる記述	習熟を図るための配慮事項 * ()内は各教科学習指導要領解説のページ数	習熟を図る具体的な指導の工夫
国語	<p>第2 各学年の目標及び内容 (第5・6学年)</p> <p>1 目標(2)(前略)効果的に表現しようとする態度を育てる。</p> <p>2 内容 B(1)ア 目的や意図に応じて、自分の考えを効果的に書くこと。表現の効果などについて確かめたり工夫したりすること。</p> <p>第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い</p> <p>1 (1)(前略)その後の学年で程度を高めて取り上げたりして、(後略)</p> <p>2 (1)音声、文字、文法的事項などのうち繰り返し学習させることが必要なものについては、特に取り上げて学習させるように工夫すること。</p> <p>3 (1)(前略)児童の発達段階に即して適切な話題や題材を精選して調和的に取り上げること。</p>	<p>螺旋的・反復的に繰り返しの学習</p> <p>・指導内容が系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに螺旋的・反復的に繰り返して学習することを基本としている(後略)。(P.11)</p> <p>・児童のすべての学習や日常生活に役立つ</p> <p>・国語の力の育成が児童のすべての学習や日常生活に役立つことを促すことにならなければならないし、(後略)(P.10)</p> <p>論理的に思考する力</p> <p>・その思考力や想像力とは、言語を手がかりとしながら論理的に思考する力や豊かに想像する力である。思考力や想像力などは認識力や判断力などと密接にかかわりながら、生きる力として期待される、新たな発想や思考を創造する原動力となるものである。(P.8)</p>	<p>(1) 指導計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元構成の工夫として、基礎・基本の定着をねらいとした一斉指導の時間と既習事項を活用して新たな課題の解決をねらいとした習熟の程度に応じた学習集団の時間を設定する。 <p>(2) 評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の学習状況を的確に把握するための手だてとして、学習活動に即した具体的な評価規準を設定するとともに習熟の程度に応じた具体的な指導内容を明確にする。また、毎時間、評価シートを作成し児童の実態を把握し個に応じた指導に活用する。習熟の程度に応じ学習集団を編成する際、学習振り返りカードや評価シートを活用する。 <p>(3) 表現活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論理的思考力を育てる手だてとして「自分の考えをもつ指導の工夫」「文章の構成のよさを理解する工夫」を考えた。「自分の考えをもつ指導の工夫」では、事実や事象を根拠として、自分の考えをもつようにする。また、「文章の構成のよさを理解する工夫」では、相手や目的に応じて自分の考えを明確に伝えるために構成に着目できるようにする。
社会	<p>第2 各学年の目標及び内容</p> <p>1 目標</p> <p>(3)(前略)各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、(後略)</p> <p>(第5学年)</p> <p>1 目標</p> <p>(3)(前略)各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、(後略)</p> <p>(第6学年)</p> <p>3 内容の取扱い</p> <p>(1)ア(前略)取り上げる人物や文化遺産の重点の置き方に工夫を加えるなど、精選して具体的に理解できるようにする</p> <p>(第6学年)</p> <p>第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い</p> <p>2 (2)(前略)統計資料などを効果的に活用し、(後略)</p>	<p>観察力や資料活用力、表現力(P.18)</p> <p>・第3学年及び第4学年では、地域における社会的事象を観察、調査し、地図(絵地図)や各種の具体的資料を効果的に活用し、調べたことを表現することができるようにすること(後略)。</p> <p>・第5学年では、社会的事象を具体的に調査し、地図、統計など各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現することができるようにすること(後略)。</p> <p>・第6学年では、社会的事象を具体的に調査し、地図や年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現することができるようにすること(後略)。</p> <p>社会的な思考力や判断力(P.18)</p> <p>・第3学年及び第4学年では、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力(後略)。</p> <p>・第5学年では、社会的事象の意味について考える力(後略)。</p> <p>・第6学年では、社会的事象の意味をより広い視野から考える力を育てるようにすること(後略)。</p>	<p>(1) 指導計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題解決的な学習ができるように単元を構成する。身近な具体的な事例や教材を取り上げ学習問題をつくる。追究活動や解決の場面では、学習の見直しをもって追究できるようにするとともに、観察・調査、体験的な学習、表現活動などを取り入れ、意欲をもてるようにする。 <p>(2) 評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標や内容から「社会的事象への関心・意欲・態度」「社会的な思考・判断」「観察・資料活用技能・表現」「社会的事象についての知識・理解」の観点ごとの評価規準を作成する。 ・評価シートなどを活用して児童の学習状況を見取り、基礎・基本の確実な定着を図る。また、指導に生かすことができるようにする。 <p>(3) 社会的なものの見方や考え方を育てる活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的事象から事実をとらえるために、地域の素材を教材化したり人材を活用したりした児童に身近な教材を取り入れる。 ・とらえた事実から社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力や社会的事象の意味について考える力、社会的事象の意味をより広い視野から考える力を育てるために、社会的事象を比較・関連・総合して見たり考えたり空間的、時間的に理解したり、公正に判断したり多面的にとらえたりできるような視点を与える。
算数	<p>第2 各学年の目標及び内容 (第1学年)2内容A</p> <p>(2)イ(前略)その計算が<u>確実に</u>できること。</p> <p>(第2学年)2内容A</p> <p>(2)イ(前略)それらの計算が<u>確実に</u>できること。(後略)</p> <p>(第3学年)2内容</p> <p>(2) 加法及び減法の計算が<u>確実に</u>できるようにし、(後略)</p> <p>(2)イ加法及び減法の計算が<u>確実に</u>でき、(後略)</p> <p>(3)(前略)、その計算が<u>確実に</u>できるようにし、(後略)</p> <p>(3)イ乗法の計算が<u>確実に</u>でき、(後略)</p> <p>(4)ウ除数と商が共に1位数である除法の計算が<u>確実に</u>できること。(第4学年)2内容</p> <p>(3)(前略)その計算が<u>確実に</u>できるようにし、(後略)</p> <p>(3)イ除法の計算が<u>確実に</u>でき、(後略)</p>	<p>活用する態度の育成</p> <p>・数量や図形についての基礎的・基本的な知識・技能を習得し、それを基にして多面的にものを見る力や論理的に考える力など創造性の基礎を培うとともに、事象を数理的に考察し、処理することのよさを知り、自ら進んでそれらを活用しようとする態度を一層育てるようにする。(P.2)</p> <p>系統性・発展性</p> <p>・算数には、内容の系統性が明確であるという教科としての特性がある。新しい内容を学習する際には、それまでに学習してきたことを基にして、それに積み重ねた発展させる形で学習を進めていくことが多い。(P.5)</p> <p>領域の内容の関連を図る。</p> <p>・算数の個々の内容は相互に関連し合うこと多いので、実際の指導においては、複数の領域の内容の関連を図ることが大切である。(P.29)</p> <p>・「数と計算」領域の内容は、他の領域、特に「B量と測定」や「D数量関係」などの内容と深いかわりがある。(P.31)</p>	<p>(1) 指導計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元構成の工夫として、既習事項の定着状況を把握するとともに、その補充を行う授業を設定し、習熟の程度を把握するためのテストを実施する。その結果から指導計画を立案し、一斉指導形態や習熟の程度に応じた指導形態や少人数指導形態などを決定する。各時間においては、習熟の程度に応じて、同一または、類似の内容を繰り返し学習できるようにする。 <p>(2) 評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎時間の評価シートを作成し、そのシートを基に授業分析シートを作成する。その分析より、個々の児童への支援を明確にする。 ・評価シートより、ヒントカードや発展的な課題の作成の手がかりとして、具体的な支援計画を立てる。 <p>(3) 算数的活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数学的な考え方を育てることを目的に、実験や観察のデータを基にして身近な事象を考察する課題を提示する。 ・数量や図形についての感覚を豊かにし、意味理解を深められるように、作業的・体験的な活動などの算数的活動を繰り返し行う。

	<p>第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い</p> <p>(2)論理的な思考力や直観力、問題解決の能力を育成するため、実生活における様々な事象との関連を図りつつ、作業的・体験的な活動など算数的活動を積極的に取り入れるようにする。</p> <p>(3)第2の各学年の内容の「A数と計算」、「B量と測定」、「C図形」及び「D数量関係」の間の指導の関連を図ること。その際、幾つかの内容を総合させる算数的活動を積極的に取り入れるようにすること。</p> <p>(4)(前略)その習熟や維持を図るため適宜練習の機会を設けて(後略)</p> <p>(7)内容の範囲や程度等を示す事項は、すべての児童に対して指導するものとする内容の範囲や程度等を示したものであり、学校において特に必要がある場合には、この事項にかかわらず指導することができること。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム的な要素を取り入れた算数的活動も行い、その活動の中で学習した内容を活用することで習熟を図る。
理科	<p>第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い</p> <p>(4)内容の範囲や程度等を示す事項は、すべての児童に対して指導するものとする内容の範囲や程度等を示したものであり、学校において特に必要がある場合には、この事項にかかわらず指導することができること。</p>	<p>自然の事物・現象について感じる事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観察、実験、栽培、飼育など、児童の自然の事物・現象への意図的な働き掛けを重視し、それらの活動を通して、自然の事物・現象について感じることができるようにする。(P.9) 自然の事物・現象について考える事 ・児童が自ら学び自ら考える力や主体的な学び方を習得していくため、問題を見だし、それを解決し結論を得るまでの一連の活動を体験し、問題解決の能力を獲得するとともに、自然の事物・現象について考えることができるようにする。(P.9) 事象の性質や規則性を実感すること ・自然の事物・現象に関する問題解決の活動を通して、事象の性質や規則性を実感することにより、科学的な見方や考え方を構築できるようにする。(P.9) 博物館や科学学習センターなどを積極的に活用 ・指導に当たっては、博物館や科学学習センターなどを積極的に活用するよう配慮すること。(P.104) コンピュータ、視聴覚機器など適切な機器を活用 ・観察、実験、栽培、飼育及びものづくりの指導については、指導内容に応じてコンピュータ、視聴覚機器など適切な機器を選ぶとともに、その扱いに慣れ、それらを活用できるようにすること。また、事故の防止に十分留意すること。(P.104) 	<p>(1)指導計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観察、実験、栽培、飼育などにおいて、いろいろな視点から比べることを通して、相違点や共通点に気付かせ、なぜだろうという疑問や不思議さを感じられるようにする。 ・観察、実験などの問題解決の活動を通して、自分の既知しているさまざまな自然についての素朴な見方や考え方を、少しずつ科学的なものに変容させていく計画を立てる。 ・学校外の教育施設を活用し、実体験や疑似体験を通して、児童が実感的に理解できるようにする。 <p>(2)評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価の4観点である「自然事象への関心・意欲・態度」、「科学的な思考」、「観察・実験の技能・表現」、「自然事象についての知識・理解」について、毎時間の評価シートを作成し、そのシートを基に授業分析シートを作成する。その分析より、個々の児童への支援を明確にする。 ・評価シートより、ヒントカードや発展的な課題の作成の手がかりとして、具体的な支援計画を立てる。 <p>(3)科学的な見方や考え方を育てる指導の工夫と問題解決の活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験活動では、児童は予め実験の結果を予想し、その予想を基に話し合いをして、いろいろな意見を交換する。その後実験をして結果を確かめる。結果を予想し、討論し、実験する活動の工夫をする。 ・各学年ごとの目指す問題解決の資質・能力を把握し、その力が身に付くように、一人一人の実態に応じて指導していく。 ・自分の既知の知識や体験を活用して、見通しをもって、問題解決ができるように指導していく。 ・自分の考えの妥当性を確かめるために、実証性、再現性、客観性などの条件を満たしていくように指導する。
体育	<p>第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い</p> <p>1 (1)地域や学校の実態を考慮するとともに、個々の児童の運動経験や技能の程度などに応じた指導や児童自らが運動の課題の解決を目指す活動を行えるよう工夫すること。</p> <p>(4)第2の第3学年及び第4学年の内容の「F保健」並びに第5学年及び第6学年の内容の「G保健」(以下「保健」という。)については、効果的な学習が行われるよう適切な時期に、ある程度まとまった時間を配当すること。</p> <p>2 (7)保健の指導に当たっては、積極的に実習などを取り入れたり、課題を解決したりしていくような学習を行うなど指導方法の工夫を行うこと。</p>	<p>適切な運動の経験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の発達段階に応じて運動を一層選択して履修できるようにすること。(P.2) ・児童が心身の発達の特性に合った運動を実践することによって、運動の楽しさや喜びを味わうことである。(P.12) ・発達段階に応じて高める体力の内容を重点化し、自己の体力や体の状態に応じた高め方を学ぶなど(後略)。(P.13) 健康の保持増進 ・健康・安全についての実践的な理解を通して、自らの生活行動や身近な生活環境における課題を把握し、改善することができる資質や能力の基礎を培うことを示したものである。(P.13) 技能の内容 ・特に、技能の内容については運動の楽しさや喜びを目指すことに重点を置いている。(P.16) 地域や学校の実態 ・地域や学校の実態を考慮するとともに、個々の児童の運動経験や技能の程度などに応じた指導や児童自らが運動の課題の解決を目指す活動を行えるよう工夫すること。(P.92) 	<p>(1)指導計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個々の児童の心身の発達段階、運動経験や技能の程度などに応じた指導の計画を工夫する。そのため、運動の選択を一層できるようにしたり、発達段階に応じて高める体力の内容を重点化したりするなど指導計画を工夫する。 <p>(2)評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技能、態度、学び方等についての定着状況を把握し、個に応じた支援ができるよう、評価シート等の工夫をする。 ・自己評価、相互評価等から、自己の高まりや課題を把握し、新たなためあてがもてるよう、学習カード等の工夫をする。 <p>(3)考える力を育てる指導の工夫と課題の解決を目指す活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各種の運動の仕方や作戦、ルールなどの工夫をしながら学習に取り組みめるよう、指導の工夫を行う。そのため、習熟の程度に応じて、チームや自身で運動の仕方やルールなどの工夫ができるように学習資料、カードなどの工夫をする。 ・自分やチームの力に合った運動の課題をもち、その課題の解決を目指して活動を考えたり工夫したりすることができるようにする。

作成の対象とした教科について

学習指導要領に記述が追加された教科は、小学校の4教科(社会、算数、理科、家庭)と中学校の6教科(国語、社会、数学、理科、保健体育、技術・家庭)である。しかし、中学校にのみ追加された教科も、小学校での配慮が必要であると考え、小学校の国語と体育も資料作成の対象とした。

<p>家庭</p>	<p>第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い 2 (3)内容の範囲や程度等を示す事項は、すべての児童に対して指導するものとする内容の範囲や程度等を示したものであり、学校において特に必要がある場合には、この事項にかかわらず指導することができること。</p>	<p>知識と技能などを日常生活に活用する ・家庭との連携を図り、児童が身に付けた知識と技能などを日常生活に活用するよう配慮するものとする。(P.67) 実践的・体験的な ・基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせるため、実践的・体験的な学習を一層重視するとともに(後略)。(P.3) ・衣食住などの実践的・体験的な活動を通して、実感をもって学習することを一層重視する。(P.6) 問題解決的な学習 ・環境に配慮して主体的に生活を営む能力を育てるため、自ら課題を見いだし解決を図る問題解決的な学習の充実を図る。(P.3)</p>	<p>(1) 指導計画の工夫 ・効果的な学習指導が進められるように、題材間や他教科等の関連を図って題材を配列する。 ・集団で学習するよさを考えた共通に学ぶ部分と、児童個々が別々の課題を選び教材を選んで学習を進める個別に学ぶ部分を組み合わせた学習を行うなど、題材構成や使用する教材を個に応じて工夫したり、問題解決的な学習を取り入れたりして、弾力的な学習ができるよう配慮する。 (2) 評価の工夫 ・知識・理解や技能だけでなく、問題解決的な学習における学習方法や実際の生活における実践の様子など、指導過程における様々な評価を総合して児童の能力や適性等をとらえ評価する。 ・児童自身が行う自己評価や相互評価を学習過程に効果的に位置付け、児童自身が実際の生活の中で主体的に実践しようとする態度を育て、実践する喜びが培われるようにする。 (3) 児童の生活にかかわる実践的・体験的な活動の工夫 ・児童の生活経験は、季節や行事とのかかわりの中で広げられることが多いので、学年の発展性、系統性、季節、学年行事、地域等の関連を考えた題材を配列し、身に付けた知識や技能を実際の生活に活用したり、応用、発展させて総合的に用いたりするなどの活動を工夫する。</p>
------------------	--	---	---

中学校

<p>教科</p>	<p>学習指導要領に見られる「習熟」等にかかわる記述</p>	<p>習熟を図るための配慮事項 * ()内は各教科学習指導要領解説のページ数</p>	<p>習熟を図る具体的な指導の工夫</p>
<p>国語</p>	<p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い 4 第2の内容の取扱いのうち内容の範囲や程度等を示す事項は、すべての生徒に対して指導するものとする内容の範囲や程度等を示したものである。学校において特に必要がある場合には、この事項にかかわらず指導することができること。 5 選択教科としての「国語」においては、生徒の特性等に応じた多様な学習活動が展開できるように、第2の内容その他の内容で各学校が定めるものについて、課題学習、表現や理解の能力を補完的に高める学習、発展的な学習などの学習活動を(後略) 第3 指導計画の作成と内容の取扱い</p>	<p>調和的に取り上げる ・教材は、話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと、及び読むことと書くこととの能力を偏りなく養うことや読書に親しむ態度の育成をねらいとし、生徒の発達段階に即して適切な話題や題材を精選して調和的に取り上げること。(P.112) 多様な学習活動 ・4 選択教科としての「国語」においては、生徒の特性等に応じた多様な学習活動が展開できるように、第2の内容その他の内容で各学校が定めるものについて、課題学習、表現や理解の能力を補完的に高める学習、発展的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする。(P.115) 相互に密接な関連を図る ・第2の各学年の内容の「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」、「C読むこと」及び〔言語事項〕について相互に密接な関連を図るとともに、各学年にふさわしい学習活動を組織して効果的に指導すること。(P.89) 学校図書館などを計画的に利用 ・学校図書館などを計画的に利用し、その機能の活用を図ることが大切である。(P.107) 論理的に書く能力を育てる ・「論理的に書く能力を育てる」ことは、「B書くこと」の中で重視しなければならない指導事項である。自分が書こうとする論点や考えをはっきりさせ、それに必要な情報を収集し、選択し、根拠を明確に示して説得力のある論理の展開を工夫することが求められる。また、必要な情報を的確に収集し、選択し、これを活用し、説得力のある文章を書く力を養うには、「A書くこと・聞くこと」や「C読むこと」との関連を図った指導計画の作成が大切である。(P.96)</p>	<p>(1) 指導計画の工夫 [単元構成] ・基礎・基本の定着を図る一斉指導の時間と習熟の程度に応じた学習集団による指導の時間を設定する。 [学習活動] ・他教科等や学校生活と関連させ、目的意識、相手意識、必然性のある学習の場を設定する。 ・学校図書館の活用を図り、生徒の主体的、意欲的な学習活動を充実させる。 ・三領域と一事項を関連させ指導し、螺旋的、反復的に繰り返しの学習を基本とし、言語能力を育成する。 (2) 評価の工夫 ・生徒の学習状況を的確に把握するため、学習活動に即した具体的な評価規準を設定し、習熟の程度に応じた具体的な指導内容を明確にする。 ・毎時間、評価シートを作成し生徒の実態を把握し個に応じた指導に活用する。 ・習熟の程度に応じ学習集団の編成に当たっては、学習振り返りカードや評価シートなどの学習シートを活用する。 (3) 表現活動の工夫 ・論理的な思考力を基にした表現力を育てるため「自分の考えをもつ活動」「文章の構成のよさを理解する活動」を工夫する。「自分の考えをもつ活動」では、事実や事象を根拠として、自分の考えをもつようにする。また、「文章の構成のよさを理解する活動」では、相手や目的に応じて自分の考えを明確に伝えるために構成に着目させる。 ・論理の展開から論点を明確にし、意見の中心となる部分をはっきりさせ、文章の内容を整理し、読み手に分かりやすく論理の展開が明快な文章構成に工夫することを意識させる。 ・話の大体の内容を決め、まとまりのある話として表現するための話題や、話題を具体化する材料としての話材を整えたのち、それらの組み立て方を考えさせる。 ・課題に対して自分の立場を明確にし、結論に向かうための根拠や理由の取り上げ方や述べ方、そのための材料の活用の仕方について書くようにさせる。 ・記録した文章を以後の生活に役立てようとする態度を育て、事実や事柄を正確に客観的に内容の中心をはっきりさせて書くようにさせる。</p>
<p>社会</p>	<p>第2 各分野の目標及び内容(地理的分野) 3 内容の取扱い (3)オ 国名や都道府県名を確実に身に付けさせる観点から、適宜機会を設けて計画的に指導すること。</p>	<p>多様な学習活動 ・選択教科としての「社会」においては、生徒の特性等に応じた多様な学習活動が展開できるように、第2の内容その他の内容で各学校が定めるものについて、見学・調査、課題学習、自由研究的な学習、作業的、体験的な学習、補完的な学習、発展</p>	<p>(1) 指導計画の工夫 ・知識に偏り過ぎた指導にならないようにするため、基礎的な事項・事柄を厳選して指導内容を構成する。 ・生徒の主体的な学習を促し課題を解決する能力を一層培うために各分野の内容の程度や範囲に十</p>

	<p>(5)工(前略)地域の特色を地域の規模や地域間の比較によってとらえる方法を効果的に身に付けることができるようにすること。</p> <p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い</p> <p>1(3)(前略)各分野において、第2の内容の範囲や程度に十分配慮しつつ事項を再構成するなどの工夫をして、適切な課題を設けて行う学習の充実を図るようにすること。</p> <p>3 第2の内容の取扱いのうち内容の範囲や程度等を示す事項は、全ての生徒に対して指導するものとする内容の範囲や程度等を示したものであり、学校において特に必要がある場合には、この事項にかかわらず指導することができること。</p> <p>4(前略)作業的、体験的な学習、補充的な学習、発展的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする。</p>	<p>的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする。(P.165)</p> <p>系統的に学習できるよう工夫(地理的分野)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地理的な見方や考え方及び地図の読図や作図、景観写真の読み取りなど地理的技能を身に付けることができるよう系統性に留意して計画的に指導すること。(P.75) ・地理的技能は、地理的な見方や考え方と同様、一度の学習や経験で身に付くというのではなく、それにかかわる学習を繰り返す中で、次第に習熟の程度を高めるかたちで身に付けるものである。このため、指導計画を作成する際に、地理的技能の難易度や段階性などに留意して、系統的に学習できるよう工夫する必要がある。(P.77) 重点的に選んで指導内容を構成(歴史的分野) ・生徒の発達段階を考慮し、抽象的で高度な内容や複雑な社会構造などに深入りすることは避けるとともに、各時代の特色を表す歴史的事象を重点的に選んで指導内容を構成することにより、細かな知識を記憶するだけの学習に陥らないようにすること。(P.114) 他の2分野の学習・発展的に活用(公民的分野) ・公民的分野の指導に当たっては他の2分野の学習で養われた地理的な見方や考え方、歴史的な思考力及び学び方に関わる技能を発展的に活用し、それらを一層高めるようにすることが公民的分野の目指す能力や態度の育成及び社会科の目標の達成にとって重要であることは従前と同じく述べたものである。(P.153) 	<p>分配慮しつつ事項を再構成するなどの工夫をして、適切な課題を設けて行う学習の充実をはかるようにする。</p> <p>(2) 評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標や内容から「関心・意欲・態度」「思考・判断」「観察・資料活用の技能・表現」「知識・理解」の観点ごとの評価規準を作成する。 ・評価シートなどを活用して児童の学習状況を見取り、基礎・基本の確実な定着を図る。また、指導に生かすことができるようにする。 <p>(3) 見方や考え方を育てる活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料を選択し活用する学習活動を重視するとともに作業的、体験的な学習の充実を図るようにする。その際、地図や年表を読みかつ作成すること、新聞、読み物、統計その他の資料に平素から親しみ適切に活用すること、観察や調査などの過程と結果を整理し、報告書にまとめ発表するなどの活動を取り入れるようにする。また、資料の収集、処理や発表などにあたっては、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器の活用を促すようにする。
<p>数学</p>	<p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い</p> <p>2 生徒の主体的な学習を促し数学的な見方や考え方の育成を図るため、各領域の内容を総合したり日常の事象に関連付けたりした適切な課題を設け、作業、観察、実験、調査などの活動を重視して行う課題学習を各学年で指導計画に適切に位置づけ実施するものとする。</p> <p>5 第2の内容の取扱いのうち内容の範囲や程度等を示す事項は、すべての生徒に対して指導するものとする内容の範囲や程度等を示したものであり、学校において特に必要がある場合には、この事項にかかわらず指導することができること。</p> <p>6 選択教科としての「数学」においては、生徒の特性等に応じ多様な学習活動が展開できるよう、第2の内容その他の内容で各学校が定めるものについて、課題学習、作業、実験、調査、補充的な学習、発展的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする。</p>	<p>基礎的・基本的な知識・技能を活用する態度の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数量や図形についての基礎的・基本的な知識・技能を習得し、それを基にして多面的にもものを見る力や論理的に考える力など創造性の基礎を培うとともに、事象を数理的に考察し、処理することのよさを知り、自ら進んでそれらを活用しようとする態度を一層育てるようにする。(P.2) 学ぶことの楽しさや充実感 ・実生活における様々な事象との関連を考慮しつつ、ゆとりをもって自ら課題を見つけ、主体的に問題を解決する活動を通して、学ぶことの楽しさや充実感を味わいながら学習を進めることができるようにすることを重視して、内容の改善を図る。(P.3) 課題学習の設定 ・作業、観察、実験、調査などの活動を重視し、生徒が自ら課題を見つけ、主体的に解決していく問題解決の能力を高め、数学的な見方や考え方を一層深めていくことができるよう、課題学習を、各学年において適切に位置付け、実施するものとした。(P.9) 選択学習としての「数学」の拡充 ・生徒の能力・適正、興味・関心等に配慮した選択学習が全学年で実施できるようにした。必修の数学で学んだことをしっかりと理解できるようにすることは言うまでもなく、さらに発展的な数学の内容について学びたいと考える生徒にも対応できるようにした。(P.10) 指導計画作成上の配慮事項 ・2の各学年の目標の達成に支障のない範囲内で、当該学年の内容の一部を軽く取り扱い、それを後の学年で指導することができる。また、学年の目標を逸脱しない範囲内で、後の学年の内容の一部を加えて指導することもできる。(P.115) コンピュータを活用 ・数と式領域における計算等についての基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るために、個々の生徒に応じて、補充、習熟といった学習にコンピュータを活用するよう配慮する。(P.127) 	<p>(1) 指導計画の工夫</p> <p>[教材]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習に挑戦しようとする必然性や必要性を感じさせる指導をする。 ・興味関心や疑問不思議さ、好奇心などを抱かせる指導をする。 ・適当な難しさを感じさせながらも、過去の学習を生かし解決させる指導をする。 ・達成感や満足感を味わわせる指導をする。 ・習熟の程度に応じ、同一または、類似の内容を必要に応じて繰り返し学習する。 <p>[指導形態]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・習熟の程度に応じて、少人数指導を行う。 ・習熟の程度に大きな差が生じた場合には、習熟の程度に応じた学級編成による指導をする。 <p>(2) 評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価シートを活用し、習熟の程度に応じたヒントカードを作成したり、発展問題を準備したりする。 <p>(3) 数学的な見方や考え方を育てる活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験や観察のデータをもとに、問題解決的な学習活動を工夫する。 ・作業的、体験的な活動など数学的活動を繰り返し行うことで、数量や図形についての感覚を豊かにしたり、意味理解を深めたりする。 ・ゲーム的活動を体験する中で、原理原則の意味理解を定着させる。 ・自力解決を図るヒントカードを与える。 ・習熟の程度に応じて、発展的な課題に挑戦させる。
<p>理科</p>	<p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い</p> <p>7(前略)課題研究、野外観察、補充的な学習、発展的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする。</p>	<p>十分な観察や実験の時間・探究する時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校や生徒の実態に応じ、十分な観察や実験の時間、課題解決のために探究する時間などを設けるよう配慮すること。(P.100) 観察、実験、野外観察を重視する ・観察、実験、野外観察を重視するとともに、地域の環境や学校の実態を生かし、自然を科学的に調べる能力の育成及び基本的な概念の形成が段階的に無理なく行えるようにすること。(P.101) 	<p>(1) 指導計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の能力・適性、興味・関心などに応じた多様な学習活動を展開する機会を作り、一人一人の個性や創造性などの伸長をはかるように計画を立てる。 ・観察や実験に十分時間をかけたり、生徒自らの課題を探究する時間を設けるなどゆとりをもった学習が行えるようにする。 <p>(2) 評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価の4観点である「自然事象への関心・意欲・態度」、「科学的な思考」、「観察・実験の技能

			<ul style="list-style-type: none"> ・表現」、「自然事象についての知識・理解」について、毎時間の評価シートを作成し、そのシートを基に授業分析シートを作成する。その分析より、個々の児童への支援を明確にする。 ・評価シートより、ヒントカードや発展的な課題の作成の手がかりとして、具体的な支援計画を立てる。 <p>(3) 科学的な見方や考え方を育てる指導の工夫と問題解決の活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験活動では、児童は予め実験の結果を予想し、その予想を基に話し合いをして、いろいろな意見を交換する。その後実験をして結果を確かめる。結果を予想し、討論し、実験する活動の工夫をする。 ・探究的な学習を通して、自ら問題を見つけ、試行錯誤しながら自分で考え、解決していくなどの問題解決能力の育成を重視する。 ・自然の事象・現象の中に問題を見つけ考えたり、その解決に当たっても、いろいろな立場や視点をもち、広く情報を収集して公正にとらえ、合理的に判断する「多面的、総合的な見方」を重視する。
<p>保健体育</p>	<p>[体育分野] 3 内容の取扱い (3) 内容の「A 体づくり運動」から「G ダンス」までの領域及び運動の選択並びにその指導に当たっては、地域や学校の実態及び生徒の特性等を考慮するものとする。その際、指導に当たっては、内容の「H 体育に関する知識」との関連を図るとともに、内容の「B 器械運動」から「G ダンス」までの領域については、それぞれの運動の特性に触れるために必要な体力を生徒自ら高めるように留意するものとする。</p> <p>[保健分野] 3 内容の取扱い (10) 保健分野の指導に際しては、積極的に実験や実習を取り入れたり、課題学習を行うなど指導方法の工夫を行うものとする。</p> <p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い 1 (1) 工 (前略) 各学年において効果的な学習が行われるよう適切な時期にある程度まとまった時間を配当すること。</p>	<p>生徒の発達段階に応じた運動の選択</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の発達段階に応じて、運動を一層選択して履修できるようにすることや体力の向上を図る上で内容を重点化するなどの改善を図る。(P.3) ・自己の能力に適した課題を解決するなどにより運動の楽しさや喜びを味わい、生涯を通じて運動に親しみ、生活を明るく健全で豊かなものにするための態度を育てることを目指した。(P.6) 健康の保持増進にかかわる実践力 ・心身の健康の保持増進にかかわる実践力を育成するため、単なる暗記や知識理解に止まらず、自ら課題を見つけ、よりよく課題を解決していくような学習活動(課題学習)を展開したり、実験や実習など体験的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を行うとともに、適切な意志決定や行動選択が必要であることを示した。(P.11) 	<p>(1) 指導計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個々の児童の心身の発達段階、運動経験や技能の程度などに応じた指導の計画を工夫する。そのため、発達段階や習熟の程度に応じて、少人数指導を行ったり、自分で選択して取り組める場を設定したりするなど指導計画の工夫をする。 <p>(2) 評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技能、態度、学び方についての定着状況を把握し、個に応じた支援ができるよう、評価シート等の工夫をする。 ・自己評価、相互評価等から、自己の高まりや課題を把握し、新たなめあてがもてるよう、学習カード等の工夫をする。 <p>(3) 考える力を育てる指導の工夫と課題の解決を目指す活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各種の運動の仕方や作戦、ルールなどの工夫をしながら学習に取り組めるよう、指導の工夫を行う。そのため、習熟の程度に応じて、チームや自身で運動の仕方やルールなどの工夫ができるように学習資料、カードなどの工夫をする。 ・自己の課題やチームの課題の解決を目指して、練習の仕方や試合の仕方を考えたり工夫したりすることができる。
<p>技術・家庭</p>	<p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い 4 選択教科としての「技術・家庭」においては、生徒の特性等に応じ多様な学習活動が展開できるよう、第2の内容その他の内容で各学校が定めるものについて、課題学習、基礎的・基本的な知識と技術の定着を図るための補充的な学習、地域の実態に即したり各分野の内容を統合したりする発展的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする。</p>	<p>家庭や地域社会における実践に結びつける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(3) 題材の設定 生徒の日常生活とのかかわりを重視したもので、家庭や地域社会における実践に結び付けることができるもの。(P.81) 具体的な学習活動 ・生徒の生活ともかかわらせて具体的な題材を工夫することが重要である(P.11) ・学習したことが生徒の生活の場で生かせるよう具体的な学習活動を検討することが必要である。(P.82) 問題解決的な学習活動 ・仕事の楽しさや完成の喜びが味わえるよう生徒の実態に即した内容や活動を準備するとともに、自ら課題を見いだし解決を図る問題解決的な学習活動を一層充実させることが重要である。(P.12) 「補充的な学習」 ・(前略) 基礎的・基本的な内容を含んだ題材や、易しいものから複雑で高度な内容を含んだ題材を用意し、生徒の個性を生かすとともに、習熟の程度に応じた個別の指導ができるよう配慮することが大切である。(P.89) 「発展的な学習」 ・(前略) これらの学習の充実を図るには、生徒の興味・関心を一層生かすとともに、自主的・自発的な学習を促すことにより、生徒の意欲を喚起したり、成就感を味わわせるようにすることが大切である。例えば、生徒の実態に応じて、個人又はグループで実験、調査・研究に取り組んだり、製作品をコンテストに出品したりすることが考えられる。(P.89) 	<p>(1) 指導計画の工夫</p> <p>[題材]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仕事の楽しさや完成の喜びが味わえるような題材を工夫する。 ・生徒の日常生活とのかかわりを重視した具体的な題材の工夫を行う。 <p>[指導形態]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態に応じて学習集団を編成し、個人又はグループで実験、調査・調査に取り組んだりさせる。 <p>(2) 評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標や内容から「生活や技術への関心・意欲・態度」「生活を工夫し創造する能力」「生活の技能」「生活や技術の知識・理解」の観点ごとの評価規準を作成する。 ・評価シートなどを活用して生徒の学習状況を見取り、基礎・基本の確実な定着を図る。また、指導に生かすことができるようにする。 <p>(3) 考える力を育てる指導の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら課題を見いだし解決を図る問題解決的な学習活動を行い、生活改善のための思考力や実践力を育てる。そのため、習熟の程度に応じて、自力解決を図るヒントカードを与えたりする。また、多面的な見方や考え方ができるようにするため、習熟の程度に応じて、発展的な問題に取り組ませる。